

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会

編集 同窓会会報編集委員会

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋4-4-2

ホームページ <http://www.sin-syu.jp/>

Eメール shinshu@tsuchiura1-h.ibk.ed.jp



会長あいさつ

会長 大野 金一

(高8回)

毎年4月に開催される進修同窓会の総会も、昨年度に続いて今年度も、新型コロナウイルスの影響により中止し、評議員会の決議をもって総会の決議に代えることにさせていただきますました。その評議員会で引き続き会長職をお引き受けいたしました。

同じその評議員会で、当会の規約を改正し、本部幹事のうち4名を常任幹事とし、総務・財務・広報・事務局を担当させることにしました。

いままでは、副会長20名、本部幹事40名という規定のみで、実働部隊は存在せず、会報編集委員会、旧本館活用委員会の事務は別として、その他の事務は事務局に集中していたので、常任幹事制度を設け、常任幹事が中心となつて、同窓会を運営していくという仕組みにしたわけです。

いまの進修同窓会の課題は、年会費の納付率が非常に低いということです。

本会の支部では、会員の親睦を図るという役割がありますが、本部の仕事は、創立100周年、120周年とかの節目では、記念事業が加わりますが、平時においては、総会・周年祝賀式の開催、旧本館の活用のほかは、在校生への物心両面の支援と母校の状況を同窓会員に知らせる(会報発行)仕事なので、ある程度の年会費収入で足りませんが、創立100周年事業として建設し、在校生の学習や活動のために使用している進修学習館やアリーナの修繕費を、その都度寄付を募るというのではなく、いまから積立金と

して積み立てておくべきです。いまの年会費3,000円でそれは十分可能です。令和3年度の納付者は、昭和30年代から40年代の卒業生は949名ですが、そのあとは、若くなるほど減少し、平成20年以降の卒業生は156名です。この傾向で行くと、これから数年後以降、どうなるか火を見るより明らかです。加えて、本年度から附属中学校が併設され、その2クラス分高校卒業生が減ることになります。

年会費納付者が少ないということは、住所不明者が多いことも起因しています。卒業生の3分の1も住所不明という年次もあります。

在校生の活動を支援するためにも、財務担当常任幹事を中心に、年会費の納付率の向上のための方策を練っていたのですが、本部では、10年に1度の周年行事で、学年幹事が住所を調査する以外手段がないので、いろいろな親睦を行う各支部や部活のOB会などで、若手会員の参加を呼び掛けていただくようお願いするしかありません。会員の皆様にもぜひご協力をお願いします。

なお、来年度総会の開催については、本年9月3日に開催した本部の臨時正副会長会議において、現在の新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて、さらなるパンデミックが起らない限り、令和5年度には、4年ぶりに、総会と卒業60・50・40・25・15周年の祝賀式を開催することに決定しました。



校長あいさつ

校長 中澤 齊
(高33回)

進修同窓会の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。また、日頃より本校の教育活動をご理解頂くと共に、旧本館や進修学習館の整備など、多大なご支援を頂いており、心より厚く御礼申し上げます。

現在、本校では、全日制830名、定時制103名、附属中160名の生徒が、「自主・協同・責任」の校訓の下、日々の学習は勿論、部活動や生徒会活動、委員会活動などに積極的に参加して、充実した学校生活を送っております。その一端をご紹介します。

進学面では、今年3月、東京大学14名、京都大学6名、東北大学29名、医学部医学科29名など多くの難関大学合格を達成することができました。詳細は、本誌「進路状況報告」をご覧頂きたいと思いますが、本校は、全国有数の進学校として、普段の授業や東大研究会、医学コースなどの取組により、生徒の進路希望実現を支え、更なる発展を期しています。

特別活動においては、6月に「第75回一高祭」を生徒の家族限定ながら3年ぶりに公開で開催しました。約2千人の来場者を迎えて、各クラスの創意工夫に満ちた企画や、選抜メンバーでのディベート、文化部の発表などで、大いに盛り上がりました。生徒達が自主的に活動する各委員会のノウハウも含めて伝統をしっかり継承できたと思います。また、9月の「一高オリピック」、10月の「歩く会」も先輩方が築いてこられた伝統の上に、附属中の生徒も参加して、新しい発想を加えながら学校文化として後輩に受け継がれておりま

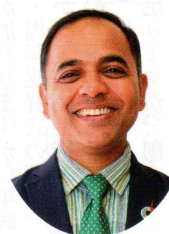
す。

部活動では、多くの部が県大会や更に上位の大会で活躍してくれました。全日制では、華道部が「第5回全国高校生花いけバトル」と「第2回高校生花いけバトル全国選抜大会」の2大会で全国優勝したことが特筆されます。他にもヨット部が関東大会で優勝してインターハイに出場、囲碁部、合唱部、弦楽部が全国総文祭に出場、ソフトテニス部、陸上競技部、水泳部が関東大会に出場するなど素晴らしい成果を上げてくれました。定時制では、バドミントン部と陸上競技部が定時制通信制体育大会県大会で優勝し、全国大会に駒を進めました。附属中も、陸上競技部が県南大会を勝ち抜き県大会に出場するなど、頑張っています。

以上、現況を紹介しましたが、土浦一高は、創立125年の歴史と伝統を踏まえながら、様々な変化を柔軟に取り入れ、更なる発展・進化を図ってまいります。

最後に、私事ですが、今年度が38年の教員生活の最後の年となりました。教職員や生徒、保護者、そして同窓会の皆様など多くの方に支えていただき、教員生活最後の年を母校の校長として勤務させていただいたことは、この上ない喜びでございます。微力ではありますが、最後まで職責を果たすべく、精一杯努めて参る所存ですので、進修同窓会の皆様には、今後も本校へのお力添えを賜りますようお願いいたします。進修同窓会の益々のご発展と、会員の皆様の方々のご健勝をご祈念申し上げます。

新任職員紹介



副校長 プラニク・ヨゲンドラ

よぎ（プラニク・ヨゲンドラ）と申します。インド出身ですが、日本在住歴は20年以上です。4月に茨城県で民間校長として採用されました。今年度は本校の副校長として配属され、進修同窓会の皆様には温かいご指導とご支援を頂いており心から感謝致します。今後とも、同窓会の皆様との協同のもとで、本校の更なる発展に邁進したいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

定時制教頭 武田 和子（高39回）



日頃より定時制における教育活動にご理解とご支援を賜り、深く感謝申し上げます。

4月の着任に際し、同窓生である私にとつて、桜花爛漫の旧正門をくぐりぬけ、これから始まる高校生活に心躍らせていた頃がとて懐かしく感じられました。定時制の生徒は、皆一様に前へ前へと学んでおります。ひとりひとりに寄り添ったぬくもりある指導を心がけていきたいと思っております。今後とも更なるご支援を賜りますようお願い申し上げます。



附属中教頭 廣瀬 光幸（高38回）

進修同窓会の皆様には、日頃より本校の教育活動に多大なるご支援を賜り、深く感謝申し上げます。附属中が開校して二年目となりますが、中学生はお手本となる一高生の背中を見ながら、充実した毎日を送っております。進修同窓会の皆様を守られてきた伝統を受け継ぎながら、発展のために精一杯頑張っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

同窓会有志によるウクライナ 難民への支援について

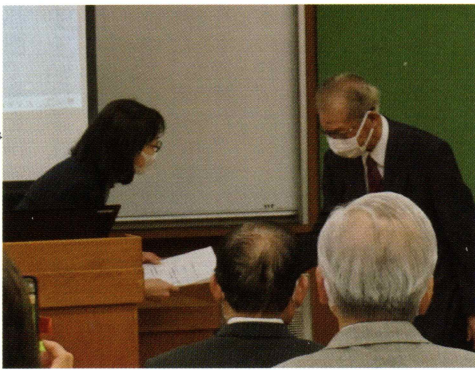
令和4年4月15日、土浦一高の進修学習館で行われた役員会の折、大野会長からウクライナ難民への支援金（1,276,000円）を「難民を助ける会」（本部・東京 会長・長（おさ）有紀枝さん 昭和57年卒 高34回）に謹呈した。

長 有紀枝さんは、現在立教大学大学院教授でもあり、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻により発生した難民の支援のため、日々奮闘中にも拘らず、東京からわざわざお越し頂いた。当日は短い時間ではあったが、役員を前に、「難民を助ける会」のアジアやアフリカでのこれまでの支援活動の様子やウクライナ難民の支援の現状について、現地に派遣した職員からの生々しい写真や動画を交えてご説明頂き、戦争の悲惨さや恐ろしさを改めて感じさせられた。

「難民を助ける会」は、尾崎行雄氏の三女である相馬雪香氏が、昭和54年に難民救済のために設立した団体で、その後特定非営利活動法人となった。長さんは職員として活動に関わり、

その後、長く理事長として活躍し、昨年から会長を務められている。旧ユーゴスラビアでの緊急人道支援や地雷対策などに携わった後、東京大学大学院でボスニアの集団殺害事件の研究で博士号を取得した。恒例の土浦一高の文化講演会で、全生徒に難民支援の現状についてのご講演を頂いたこともある。

3月の定例の役員会で、ウクライナ難民の悲惨な現状に何か支援ができないか、との提案があり、緊急であったので、募金は役員など一部の同窓生に声掛けし、集まったお金は、難民支援活動に尽力している同窓生への応援も込めて、長さんが会長を務める同会へ贈呈することになったのである。支援はすべて個人の募金で賄い支援金は、難



民への食料や日用品の提供に使うとのことである。

最後に、ウクライナをはじめとする、この地球上の各地から紛争や戦争といった行為が無くなり、人々が平和で豊かな生活ができる世の中になること、そして「難民を助ける会」などというものが活動しなくてもよいような世界になることを強く願って、報告とする。

副会長 武井 秀一（高23回）

回顧

卒業60周年を迎えて

高13回 清水 浩

昭和33年の春、私たちは母校土浦一高の門をくぐった。上野剛校長先生より入学許可の宣言を賜り、山本英校長先生より卒業証書を戴くまでの高校3年間は、生涯の中で一際輝きに満ちた時間であり、高揚感に包まれた日々であったように思う。人の心の深奥は窺う術もないが、当時の時代の息吹が私たちの生活に色濃く投影されていたことは想像に難くない。

当時は神武景気に端を発する昭和30年代の高度経済成長のただ中にあり、戦後不況を乗り越えて日本が少しずつ自信を取り

戻しつつあった時代である。同時に当時の日本社会は、安保問題や学生運動で騒然としていた。堀越昭代表幹事の言葉（卒業50周年記念誌）を借りれば、「思想信条は異なっても…：それぞれに自らを律する明確なポリシーを持ち、日本人としての誇りと国を思う気概に満ちて」いた。私たちは、「そうした日本社会のマグマを肌で感じながら」自立の道を歩んでいたように思う。

その一方、学習環境は必ずしも恵まれていたとは言えない。1年時の教室は昭和16年に建てられたバラック風の建物で、定時制の教室との共用スペースであり、2、3年時を過ごした本館は、採光が悪く薄暗い。だが私たちは歴史と伝統を纏ったその重厚な校舎で学べる幸せを実感していた。椅子と一体化した机や階段教室、入江信太郎先生考案の一高体操や水泳授業前の禪締めなど、どれ一つをとっても新鮮な驚きと魅力に満ちていた。生徒会主導で成し遂げた学年標章の制定も懐かしい。授業はアカデミックで、時として食いや下がる生徒と教師の真剣勝負の場と化した。それらの全てが一高生としての生活を彩った。

その充実した生活と主体的な活動の先に、その後の人生が形作られたことは言うまでもない。そんな私たち生徒の自主性を重んじる校風と先生方の大らかな包容力に包まれて自由闊達な青春時代を過ごさせていただいたことにあらためて感謝申し上げます。

さて、昭和40年代以降、日本社会は急速な変化と進化の時代を迎え、常に新しい価値観と激しい競争原理や成果主義が求められる中で、折々に私たちの心の支えになったのは、一高卒の自負であり、行く先々で生まれた進修同窓生との絆であったように思う。その絆は時を経るごとに輝きを増し心の拠り所になっている。

世情は今コロナ禍のために相互の交流も儘ならないが、感染の一日も早い終息と共に、進修同窓会がますます強い絆で結ばれることを願ってやまない。

卒業60周年ー私たちの時代

高14回 南 隆男

1962年（昭和37年）3月に土浦一高を巣立った私たちが私たちはさて、どういう時代を

生きて来て現在に至るのであるうか。

「同窓生」という言いかたもあるが、「同時代人」との言いかたもある。1963年に『高校三年生』で歌手デビューをした舟木一夫。彼は1944年（昭和19年）生まれで、ちなみに、私とは同時代人だ。その彼が『高校三年生』の次に歌ったのが『学園広場』。

空に向かって上げた手に若さがいっぱい飛んでいた。肩組み合って友と歌った若い歌。

／僕が卒業してからも忘れはしないよ、いつまでも。学園広場は青春広場。夢と希望がある広場。／学園広場に咲いてる花もひとつひとつが思い出さ。――

今年の4月23日。私たちは、卒業60周年ということで進修同窓会の総会にと招待を受け、学園広場で参集・対面のはずだった。ところが、コロナ感染が収束せずで、総会そのものが中止に。

私たちの時代は、「高校全入」の時代でも、また、なかった。

『ああ上野駅』という歌があるが、中学校卒業生、とりわけ東北6県からの中卒者が東京首

都圏で職を得て、15歳で職業人生を始めていく、そういう時代。

金（きん）の卵とも呼ばれた、実直で優秀で、安価の若年労働力。彼らこそ、戦後日本の経済成長と発展を支えた中核的戦略的人材だった。ちなみに、1959年中卒者の高校進学率は50%。1962年高校修了者の大学進学率は、男子63%、女子は33%にすぎなかった。

大学への進学率ということでは、私たちがの頃は、先生が「水戸一高に追い付け、追い越せ」ということで、熱く、一生懸命のかかわりであられたと思う。ある種の必死さも感じ取れた。

そういう勉強一途、学業成績最優先の状況下の私たちではあったが、それぞれが何らかの部に所属して、部活動も楽しくやっていたと思う。私は、「弁論部」に入り、学業が疎かになるほどに熱中した。勉強してるよりもよっぽど楽しかったのである。部活の場所が講堂であったため、同じく講堂が部活また練習の場であった「演劇部」「合唱部」「籠球部」「体操部」の同窓生たちと親密になれたのも

貴重なことだった。

さて、私たちが第1学年次も了えて春休みへと入ったそんな折、忘れられない、ユニークな、共通体験があった。松竹制作の映画『紺碧の空遠く』へのエキストラ出演・男子生徒の全員が予科練生に扮して同映画に出演したのだった。獅子文六が戦時中に書いた小説『一号倶楽部』を、松山善三が脚色、井上和男が監督して、1960年4月1日に全国公開された。

三上真一郎、山本豊三、島かおりをメインキャストに、山田五十鈴、杉村春子、岸田今日子、宮口精二らベテラン俳優が脇を固めての、大作映画だった。

余談ながら、同じ1960年の10月9日に公開された松竹映画が、大島渚の監督第4作目の『日本の夜と霧』であった。不評、不入りもあって、松竹は、公開のその3日後に、同映画の劇場上映を中止。当然の悶着があった、大島渚は、松竹専属女優で妻となっていく小山明子とともに、また、同志的盟友関係にあり松竹専属の脚本家だった石堂淑朗、田村孟のふたりと一緒に、決然として、松竹株式

る。大島渚、このとき、28歳。

さらに余談ながら、1960年は「日米安保条約」改定の年であり、安保反対の国会議事堂前デモの人の渦のなかで、東大学生の樺美智子（22歳）が「圧死」していく。時の内閣総理大臣は岸信介で、先般、兇弾に撃たれて急逝された安倍晋三元首相の祖父である。

（『紺碧の空遠く』『日本の夜と霧』ともにDVDで市販されていますので、よかつたら、ご覧になってみてください。）

私たち土浦一高第14回卒者は、昭和18〜19年に出生の同時代人で、思えば、太平洋戦争中の生まれだ。

同戦争が終結して（＝敗戦となつて）77年が経過。百寿時代の到来とも、世界一の少子高齢化でほどなく、日本沈没が起こってくる、とも言われませんが、「靖国（やすくに）で会おうぜっ」となぞ哀切に語り合っている、私のような共通体験が私たち同窓生とに無かつたそのことに、私は、幸せを感じています。

卒業50年の回想

高24回 小泉 裕司



私たちが高24回生は、雪の入試を経て入学しました。昭和44年3月12日、明け方からの大雪で公共交通はストップ、父の勤務先の車で近所の幼なじみと土浦一高に向かい、繰り下げた開始時刻に間に合いました。2日目は1日繰り延べとなりました。

この年、科学技術に対応する人材育成の名目で新設されたのが「理数科」です。3年間クラス替えがないことで、同窓会では、級友同士の親交の深さがうかがえます。

やはりこの年に登場した「歩く会」は、雨にもコロナにも負けず途切れなく受け継がれ、今年第54回を迎えたとのこと。完歩の喜びは得がたい経験です。3年生当時のコースは、旧八郷町の小桜小学校から筑波山麓を経て一高までの高低差に富む20数km。その前夜、私たち級友5人は旧友部町の友人宅で仮眠後、小学校までの約20kmを曉行しました。朝方に合流後は、ただただ眠かった記憶だけが残り

ます。「スタンド・バイ・ミー」的な小さな冒険は、担任の上木幹夫先生の神対応で橋本校長の許可を得ることができました。こうした生徒の自発的・主体的な行動への寛容な学風は、不易な魂として連綿と受け継がれてきたのでしょう。

熱血指導もありました。「私の気持ちがあかんねえかー」。受験が迫った放課後、帰宅せず教室でトランプゲームに興じていた私たちは、横一列に直立して担任から叱咤されました。温厚篤実な人柄から想像もつかぬ形相でしたが、直球の情熱と人間味あふれるエールで感涙しました。まるで「昭和」の学園ドラマの一コマです。

猛暑が続く今夏の某日、夏休みの母校を訪問しました。50年前と校舎の配置は変容、バレー部員の私の主戦場の体育館は空調設備が整い、運動部員が学年や部を超えて親交を深めた木造長屋の部室は鉄骨造に世代交代するなど旧本館以外、当時の建屋は皆無です。学び舎に残した友との語らい、共にスポーツで汗を流した日々は、瞑目の向こうで輝いています。

今もって先行きの見えないコロナ禍に加え、今年起きたロシ

ア軍によるウクライナ侵攻が長期化する中、やり場のない怒りや無力感にさいなまれる日々が続きます。一陽来復、共に学び、共に生きた同級生と再会し、モノクロとカラー写真が入り交じった半世紀前のアルバムに刻まれた濃密な青春の記憶を共有したいと、切に願うばかりです。

末筆ながら、事情推察の上、周年行事取りやめを英断された大野会長・役員の方々に、ほどよく再会と交流の場の創出に尽力される幹事各位に敬意を表し、結びといたします。



卒業40周年を迎えて思い出すること

高34回 山田 伸一



先日、久しぶりに旧本館を訪れました。旧本館を歩い

ていると、在学当時の思い出がよみがえります。私たちの代

は、ちょうど新校舎建て替えの時期と重なり、プレハブ校舎で学んだ世代でした。現在と違い、教室にエアコンなど入っていない時代ですから、夏の暑さは尋常ではありません。よく「目玉焼きが焼けるほど暑い(熱い)」と言うことがありますが、本当に目玉焼きが焼けるかどうかやってみようとした同級生が何人もいたのを見たときには、やはり一高って面白いやつが多いな、と妙に納得したので覚えています。

在学中の思い出は本当に多く、何を語っていいのか迷うほどです。一高祭の準備にかこつけて、旧本館に隠れて夜遅くまで語り合ったこと。クラスキャンプでは、担任の先生の、普段の様子からは、うかがい知ることのできない恋愛談を聞くことができたこと等々、数え上げれば

ばきりがないほどです。一高時代の記憶を紐解いていくと、そこには、いつも友人たちや先生方の姿があります。友人に恵まれ、そして、生徒たちを大らかに見守ってくれた先生方のおかげで、勉強嫌いだっただけのようにな者も高校生活を楽しく送れたのだらうと、感謝の気持ちとともに思い出しています。

さて、友人や先生方との思い出が多かった一高時代ですが、それとは別の意味で記憶に残っているものがあります。それは、入学前の合格者説明会でのことです。説明会で配付された資料がどのようなものだったか、今ではほとんど思い出せませんが、一つだけ、遠藤校長の姿とともに甦ってくるものがあります。「100冊の本」だったか「300冊の本」だったかタイトルは忘れてしまいました

が、わら半紙に印刷されたそのリストについて、校長は「君たちはこれからの3年間でこの本を読むのです」とおっしゃいました。実際はそのようには話されなかったとは思いますが、私には、「一高に入学したならば、このリストの本を読まなければならぬ」というように聞こえたのです。読書には抵抗がな

ったものの、問題はそのリストに挙げられている本でした。リストには、文庫本に混じって、新書や専門書など、見たことも聞いたこともないようなタイトルの本が並んでいます。遠藤校長の話聞きながら、私は、本のリストを食い入るように見つめていました。小林秀雄は学生時代、いつも複数の本を平行して読んでいたという話を聞いて、私も複数の本を読むようになりました。定期考査が近づくと、読書熱は一層高まりました。成績は推して知るべしです。

高校時代の読書は、いわゆる濫読であったかもしれませんが、今になって思うと、その後の私の人生に大きな影響を与えてくれた大切なものでした。

卒業25周年を迎えて

第49回 青山 大人

皆様もご承知のように、明治30(1897)年創立の母校土浦一高の旧土浦中学校本館(明治37(1904)年建設)は、ゴシック調の外観に、4本のコリント式柱の玄関口と教会をイメージさせる塔を配し、明治期の木造洋風建築、いわゆる日本の

近代建築を代表する建築物として、高く評価されており、文化庁から、昭和51(1976)年に旧制中学校校舎の重要文化財第1号に指定されました。

本館は、NHK連続テレビ小説「おひさま」で主人公が通う安曇野女学校として使用された他、ドラマ「坂の上の雲」「白洲次郎」「長谷川町子物語」、映画「天心」など、数々の作品のロケ地としても有名です。

このような、歴史と伝統とを誇る本校に、私たち高49回生は、平成6(1994)年4月に入学し、平成9(1997)年3月に卒業した学年です。高校時代には、バブル崩壊後の経済の停滞、阪神淡路大震災という大きな自然災害、地下鉄サリン事件という宗教が絡んだ悲惨なテロも発生しました。日本全体が暗くなりつつありました

が、プロ野球の野茂投手が紆余曲折を乗り越え、アメリカのメジャーリーグで活躍する姿を見て、島国日本の中に蔓延する常識に囚われず、果敢に挑戦する行動力と大きな目標を掲げ達成する実行力とに、感動と勇気を貰ったのを覚えています。

さて、当時の土浦一高には、東大合格者の数を競い合っていた

る節があり、94年30名、95年33名、96年32名、そして、私たちが卒業した97年には43名、と過去に一番多い東大合格が出た学年でありました。今でもよく覚えていています。私自身、土浦一高に入学して、勉強ができる人には、上には上がいる、ということ

を思い知らされました。おそらく、多くの一高生が同じ感じを持つたと思います。今振り返れば、同じ舞台で競わず、それぞれが自分の強みを知り、その強みを活かして、自分の得意なフィールドで活躍しなければいけないことを肌で実感できた、貴重な3年間だったと思えます。

この経験を高校時代に得られたことは、とても大きかったです。さて、私が茨城県議会議員だった間(2006年〜2014年)に、本館は、竣工して110年余りを経過、老朽化が著しく、2011年には、東日本大震災での被災が追い打ちをかけた、一刻も早い改修工事が必要な状態でした。

ここで、一つ問題が浮上しました。国指定重要文化財の大規模な工事には、竣工から150年を経過していることが基準になつていました。本校旧本館の場合、それに満たなかったのです。しかし、竣工から110年

余を経過し、建物も弱っており、とてもあと40年も待つことはできません。そのような中、進修同窓会の

役員1人であった小野治氏(高9回)からお話を頂き、土浦一高卒の茨城県議会議員の2人、すなわち石岡市選出の故・櫻井富夫県議(高10回)と土浦市選出の私とで、及ばずながら改修運動に取り組みました。老朽化した母校を救うべく、県の教育庁や文化庁と交渉を重ね、異例の早期改修工事の実現に漕ぎつけました。

改修運動を通じて、改めて、本館の文化財としての価値を実感し、明治期の建築技術の高さに驚くばかりでありました。また、その建設費に、当時の茨城県予算の約6%にもあたる多大な費用が投じられた事実からも、明治維新後の新政府が日本の近代化に向けて、いかに教育

を重視していたかが分かります。私は県立高校で学ばせていただき、今の自分があるというのを自覚しています。公教育の充実

は、日本の将来を作る基礎になります。これには、今でも変

わりがありません。これからも国会議員として、公教育の充実をはじめとする教育施策に政治がしっかりと力を入れるよう、いっそう尽力していきたいと思えます。

最後になりますが、土浦第一高等学校・附属中学校及び進修同窓会の益々のご発展と会員の皆様のご多幸とを心からご祈念申し上げます。

進修同窓会役員(令和4年度)

- 顧問・幡谷浩史(4)、大曾根宏亮(4)、青山和義(8)、校長・中澤斉(33)・会長・大野金二(8)・会長代行・小野治(9)・職務代行・長戸琴(18)・副会長・古德利光(9)、長瀬宗男(11)、貝塚勇(定13)、大竹伸(17)、飯塚哲哉(18)、竹井茂雄(19)、渡邊慎一(20)、小原芳道(21)、松井泰寿(21)、鈴木義人(21)、武井秀一(23)、豊崎利明

- (25)、杉田幸雄(29)、塚本一也(35)、副校長(全)片岡達郎(33)、副校長(全)プラニク・ヨゲンドラ、教頭(全)須藤道、教頭(定)武田和子(39)、教頭(全中)廣瀬光幸(38)、監事・草苺宏明(定10)、高山了(18)、杉山博(24)、本部幹事・事務局長・助川博夫(21)、本部幹事・飯村弘(5)、桜井光孝(定4)、石川信廣(13)、武石進(定15)、辻信行(18)、渡邊俊樹(20)、原田晋市(20)、鴻巣茂(21)、黒岩英行(23)、斉藤昇(27)、小城豊(28)、阿部哲次(28)、野口稔(29)、鈴木淳一(30)、伊勢則(31)、高野培美(31)、江田麻裕子(34)、大久保博(37)、尾形泰久(39)、大塚健司(40)、吉岡隆久(41)、伊東明彦(45)、青山大人(49)、櫻井忠男(定53)、萩原麻理(52)、鈴木絵莉(57)、校内幹事・事務室長大森伸一、教諭坂本拓也(40)

※()内数字は、卒業回数

資料提供のお願い

旧制中学校・高校の同窓生の皆様が発行された記念誌等(データでも可)を本部にご惠贈下さい。展示・保存・校史編纂の資料として活用させていただきます。

恩師からの便り

古森 貞弘 先生

(高9回)

(昭和54年4月〜平3年3月在職)



「母校奮闘記」を英語教師として語る機会に恵まれた。

卒業して23年ぶり、当時の年齢は40歳。

赴任時は遠藤俊夫校長。赴任しての第一印象は、若い先生方が目についた。新進気鋭の大学新卒、他校経験の先生方が、生徒たちが、そして校内中がハツラツとしていた。その環境が学習のみならず「一高祭」、「一高オリンピック」などの特別活動の隆盛にも、これぞ遠藤校長の革命的遺産ではなかったろうか。先生は私の在学当時も、そして今度は母校の校長にあって、学校改革は教員の質にありと、「生徒に影響を及ぼす人間力ある教師を採用していたのでは」と実感している。

英語科は10名

年齢バランスがよく、教科室には終始緊張感が。小沼三郎先生は空き時間には常に英字新聞を音読されていた。昼休み、放課後は生徒たちが質問に来室、

だから定時制の先生が下校する時間までも忙しくしていたこともあった。定期試験は問題用紙3枚と解答用紙1枚。1日でも早く返そうと採点に大忙しだった。

さて赴任1〜2年目

初年度は3年次(32回生)の教科担当。2年目は栗山学年の3H担任(33回生)。いきなりの3年次の指導には今にして大変申し訳なく思っている。生徒の資質が極めて高く、将来性ある一人ひとりの資質や将来展望を心得ての指導がものを言う。積み重ねの指導の必然性が赴任当初の体験だった。

わが高校生活を振り返って

私は9回生。当時各学年2クラスが上位で、私も籍を3年間置いたが、その意図に反して、教科書を、おまけに授業や試験をも軽んじていた。卒業した後、この事実を大いに反省し、心機一転。教員になっての新採当初から一高赴任後も、数々の最上級の研修環境・機関に身を置いて研鑽に励んできた。その後奇しくも母校への赴任となった。その出発に当たって「私の轍を生徒に踏ませまい」と決意した。つまり高校時代はまず教科書、授業、試験、読書を大事に、そして読解力の大切さを痛

感。また友人関係、部活動で培う人間関係を大事に。「そうすれば希望校への進学は容易であり、将来の基礎になる」と在職10年余心血を注いだ。

大らかで積極的な一高生

赴任3年目は36回生の担任として始まった。生徒達がかつての消極的な私とは格段に相違して、大らかで、かつ積極性に富んでいた。1年次はD組。入学早々自主的にクラス遠足。またわが家へ総出の訪問。これには驚いた。2年次はG組。一段と成長して高校生活を大いに謳歌。「一高祭」の合唱コンクールは練習に練習。そして優勝。「一高オリンピック」も総合優勝。そして3年次のA組は「古森先生は私たちが最後の担任」と大いに楽しい雰囲気。卒業式当日、かなりの生徒たちが前ぶれもなく、わが家へ。楽しく最後を飾ってくれた。

授業もしつかり受けてくれ、

熱心な学習風景はこの36回生に限らず、その後の授業でも。教科書を丸暗記している生徒達も。私も徹底して予習に励んだ。昼休み、放課後、自宅までも熱心に質問攻め。私がテストに出題する箇所の質問にはよくよく驚いた。それだけ要点を勉強していた証左である。

生徒・保護者・担任

3者の心が一つになったとき目標が達成できると思っていた。年2回の保護者面談の時「古森先生が担任になって良かった」とも。これほど嬉しいことはなかった。面談の時に家庭での話題をお願いするため「4

ツ切(コメント)をお渡しした。生徒はイヤな顔をして「先生やめて」と。「ダメ」と私。生徒たちには別に「4ツ切(期待)」を。「そのコピー」を郵送してきた卒業生も。

3年次担任の3A全員(36回生)に「受験に向かって最後の締め」を。

夏休み明けから「学習状況確認カード」を毎週月曜日に配付。生徒は週明けに「一週間の学習状況」を提出。卒業時は担任としても大満足の結果に。「もう一歩の諸君」には次年度も面会。

「学年主任」としての決意

学年英語担当が合意の下、前段の36回生から教科書(リーダー)、辞書、サイドリーダーは親しめるものを選択、また試験の平均点80点以上(学習目標と意欲の喚起)を引き続き大事にした。

それまでの英語科としての大きな流れは「難しい教材、試験問題」が優秀な一高生の学習意欲を喚起するとの不文律があったようにも。私の高校時代の名残が継続されていたようにも。

横田尚義校長は

竹園高校長から赴任早々の始業式で、母校の飛躍を期して、次の檄を飛ばした。全校生徒への激励が学年主任として新入生を3年間預かる私の心に刺さった。次のようである。「竹園高校は茨城大学へ40名以上の合格者を毎年出す。土浦一高は東京大学合格者数を全国公立高校のトップにして下さい」と。また「学年保護者代表会」挨拶では「学年主任は一つの学校の校長である」とも。以後「私の心

中・脳裏」に焼き付いた。それに学年担任の面々も「かなりの精鋭8名を配置」と理解した。そこで「生徒すべての受験科目である英語」を「全国公立高校のトップに」を第一の課題とした。一つの科目に自信がつけば「次の科目も頑張る」が私の信条。

これまで積み重ねた指導方法を改善して42回生(この学年)にも継続。しかし1年次の11月全国進研模試ではもう一歩。そこで平均40点以下の生徒には都度再テストを、英語に困難を感じる生徒の指導改善も図った。2年次は筑波大学、各研究機関を活用して生徒の希望選択に応じた訪問学習を試みた。進路選択の一助として大学入学後の専攻分野選択の一助に、研究機関とは?である。果せるかな2年次11月進研模試の英語では水戸一高より上位に。その後3年次の進研・河合塾の全国模試の結果は5教科でも、また英語単独でも全国公立高校のトップに。

それが反映してか東大現役合格19名(全国公立高校のトップに)、9名合格のクラスも(担任は後に本校校長に)。元校長遠藤先生に早速報告。横田校長の期待にも応えられた。各クラス担任、各教科担当の徹底した指導が奏功したことは歴然。そして遠藤校長・横田校長の土壌改革によって続く学年でも次々と花が咲き、今日に至っている。土浦一高の一大転機になったことは間違いない。

その後の人生も「独自性・独創性を!」「生き切る!」をモットーに、日々楽しんでいる。

卒業生レポート

『遭遇した幽霊は、三島由紀夫か開高健か』

渡邊 (千葉) とも子

(高49回)



撮影：大泉美佳
photo by miyosi oozumi

① 缶詰部屋からこんにちは

皆さま、こんにちは。
わたしは、1997年(平成9年)3月卒で、今は「千葉とも」というペンネームで小説を書く仕事をしております。土浦一高を卒業してから、25年も経つのかと、驚きを感じております。

このレポートは、「新潮社クラブ」という新潮社さんのいわゆる缶詰部屋(小説家がかもって作品に集中する部屋)で書いています。

小説の締め切りが2本迫っているのですが、ふとこのレポートの提出期限が一番早いことに気づいて、慌てて書き出したというわけ

です。
と言いましても、小説のほうの締め切りは缶詰部屋に入るほどには、差し迫ってはおりません。

この「新潮社クラブ」、開高健や三島由紀夫がかつて缶詰をしていたため、彼らの幽霊が出るの噂。そしてその幽霊に遭遇すると売れると言われているため(真偽は不明)、ぜひ会ってやるぜと籠もっているのです。

② 松本清張賞を受賞して作家デビュー

まずは、自己紹介を。
土浦一高を卒業後、筑波大学を2001年3月に卒業しております。

大学在学時は、演劇サークルに所属していて、卒業後もそちらの道に進みたかったのですが、当時は就職氷河期真っただ中で、劇団も研修生の募集を絞っております。

それで、小説ならば、ひとりでも音響も照明もできると思っ、小説教室に通いはじめたのです。生活をしていくために働かねばならず、どうせなら人の役に立つ仕事がいいと茨城県庁に入庁いたしました。働きながら小説を書き、2020年に松本清張賞を受賞して、作家デビューいたしました。

1年ほど公務員と作家を兼業して、この2022年3月に、20年勤めた茨城県庁を退職、4月から専業作家となりました。

(閑話休題)

と、ここまで書いたところで、お風呂ができたと管理人さんが声

を掛けてくださったので、1階のお風呂へ参ります。

足を踏み入れるときしきしと音のする板張りの床の脱衣所、タイル張りの洗い場と、なかなかレトロなお風呂です。昭和にタイムスリップしたような心持ちがいたします。

私が身体を洗っておりますと、脱衣所に動く人影が。

管理人さん(女性)が入ってきたのかなと思つて振り返ると、閉めておいたはずのスライドドアが開いている。思わず「わあっ」と声を上げて後ずさりしました。

ごめんなさい。幽霊に会つて売れるぞなんて意気込んでおりましたけども、ほんとうはこの類のもののが苦手なのです。

大丈夫。古いお家だと、立てつけが悪くて、自然にドアが動いてしまうことであるじゃないか。

そう自分を納得させつつ、ドアを監視しながら身体を洗います。でも髪を洗うときだけは目をつむらざるを得ず、シャンプーを流し終えて顔を上げると、またドアが開いている……。

ひゃあと思つたものの、怖さよりも作家の好奇心のほうが勝つて、湯船につかつて再びドアを観察。自分が見ているときはドアは動かない。でも、よそ見するとドアが開いている……。

駄目です。怖いです。

レポートを書いている場合ではありません。部屋に戻って、すぐに布団に入ってしまった。すると、コインコーンと何かが近づいているような高い打撃音

が。

「こういうときに音を数えちゃいけない」と、小学校の先生が教えてくれたのを思い出します。

でも、数えてはいけないといわれると、逆に数えたくなくなってしまふのが人の性。

何か別のことを考えねば……。そもそも、三島と開高ってどんな作家なのでしたっけ？

かれらが生きていた当時の社会情勢はどうだったか、その時代に小説家として何をしようとしたのか。

おそらく、わたしよりも皆さんのほうが詳しいでしょう。

③ 令和の作家として何をすべきか

三島由紀夫は小説家でありながら、政治活動家でもありました。

開高健も、新聞社の特派員としてベトナム戦争の最前線に飛びこんでいたり、帰国後に反戦活動をしたり、ノンフィクションも精力的に残しています。

ふたりとも、政治でも経済でも常に疑問を呈し、社会や人のあり方に敏感な作家だったと思えます。

文芸を含む広義の学問は、うまくいつているように見えても、ほんとうにそうなのかと常に疑問を投げかけていくことに、その本質や使命があると思つています。ふたりはまさにその使命に身を投じたといえるのではないのでしょうか。

ところで、令和4年の今、皆さんと私は同じ時代を共有しているわけなのですが、50年後、100年後に、今の時代はどのように評価されるのでしょうか。

自分が土浦一高を卒業してからの四半世紀は、リーマンショックや東日本大震災、コロナ禍等々と国難級の非常事態が続いております。

残念ながら、そんな非常事態が続いているなか、政治も経済も明らかな問題が存在しているのに、問題がないことにされてしまつていたりします。致命傷を抱えているのに、治療せず、騙し騙し過ごしてきたようなものです。

わたしは時代小説家ではありませんが、賞の選評や書評で現代の社会問題を過去の小説世界に投影する作家だといわれることがあります。

三島や開高といった文豪とは比べべくもありませんが、令和の作家のひとりとして、恐れずに現代の問題をあぶりだしていかなければならない。缶詰部屋の心霊現象におびえながら、ふとそんなことを考えました。



photo by miyosi oozumi
千葉とも子
戴天

最後に、今年5月に上梓しましたデビュー2作目の単行本『戴天』は、現代にも通じる人の宿痾「支配と服従」の関係を描こうと試みた小説です。おかげさまで、日本歴史時代作家協会の新人賞をいただくこととなり、もしご興味がありましたら、お手にとり取っていただけましたら幸いです。

母校だより

開校二年目の附属中学校

教頭 廣瀬 光幸 (高38回)

令和3年4月に開校した附属中学校。令和4年4月には、2期生の80名が新たに入学し、今年度は160名で附属中がスタートしました。先輩となった2年生の生徒たちは、1年生が見学に来た部活動紹介では、1年先輩としての自覚と責任が生まれ、たくましく見えました。今では、2つの学年で部活動を行うことで、昨年度以上に部活動にも活気が生まれ、元気に活動しています。

また、1年生にとって初めての一高祭が、6月に行われました。今年度は、生徒の家族のみという制限はあったものの、生徒以外の来場者を数多く迎えることができ、盛大に開催することができました。1年生は、射的やボーリング、謎解き、クレールゲームなど、その興味深い企画に、多くの来場者が訪れ、楽しんでいただくことができました。2年生は、昨年の経験を生かし、さらにレベルアップした

企画を学年全体で考え、「附ちゅぴちゅ」という迷路&謎解きを行いました。高校生の企画と同様に教室内に巨大迷路を作り上げ、迷路をしながら謎解きをするという企画を行いました。「附ちゅぴちゅ」は、連日大盛況で、一時は入場制限するほどでした。

夏休みには、学校説明会委員による生徒主体の学校説明会を土浦とつくばで実施しました。吹奏楽部や合唱部の発表、科学部の研究発表では、1・2年生のみの発表とは思えないほどの素晴らしさを感じました。また、進行係や動画作成、当日のプレゼン発表などでは、それぞれの生徒が自分の持ち味を存分に発揮して、附属中生のポテンシャルの高さを改めて感じる機会となりました。

部活動でも、1年生が加わったことで、どの部活動もさらに活動意欲が高まっています。運動部は、3年生が出場する大会にも1・2年生のみで出場し、貴重な経験をしました。秋から

は、同学年の大会になるので、ここからがいよいよ本番になります。今後の活躍が楽しみです。また、文化部も、高校生と一緒に一高祭で活動したり、各種大会やコンクール等に参加したりして、運動部同様、活気に満ちています。今後ますます活動の幅を広げ、活躍を期待しているところです。

学習面では、60分授業の良さを生かしながら、クロムブックやICT機器を効果的に活用し、質の高い授業を日々行っています。附属中でも土浦一高で日々実践されている「授業第一主義」を継承しながら、世界で活躍できるグローバルリーダーの育成を目指して、教職員一丸となって、生徒一人ひとりと向き合っています。

今後も「一高スタイル」を継承し、附属中の更なる発展のために、尽力してまいりたいと思います。

進修同窓会の皆様には、なお一層のご指導とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

探究学習で得たもの

3年H組 古賀弘将

私達は、紙と聞くと何となく自然を感じますが、それは自然を破壊して作っているからという皮肉でもあります。紙の無駄遣いを減らすことは、身近な環境問題対策です。そこで私達は、教育現場において紙の良さを活かしつつも、発達するICTを駆使し紙の使用量削減を達成する為の策を考察しました。

我が校が使用する紙の総量は、A4に換算して年間25万枚にもなります。無論、授業プリントや定期テストなど、学習には不可欠な紙は、従来の形を維持すべきです。しかし、テストの範囲や些細なお知らせなど、配付後すぐに処分される紙も、残念ながら大量に存在します。後者のような書類群をどう削減するか。そう考えた時、デジタルの導入が鍵になると思

いました。1人1台スマートフォンやタブレットを持つ時代、紙以外を媒体とした情報の伝達など容易いことです。これを踏まえ、探究学習発表会では、紙の使用量削減に向けたICTの活用について、幾らかのアイデア



を提示しました。実践すれば、想像以上の紙の使用量削減につながることでしょう。

外出制限のために、活動範囲は大幅に縮小されましたが、他校の探究学習委員と意見を交換したり、改善点を指摘しあったり、貴重な経験が多くあったのも事実です。地域活性化といったテーマを委員全体で学ぶ機会もありました。探究学習への担当の先生方、各市町村職員の方々の最大限のサポートがあったのものだったと感じます。この場を借りて、感謝申し上げます。

世界がSDGsを掲げる今、探究学習を通して、改めて個人の心がけの重要性を把握しまし

た。今後も、積極的に社会の問題に目を向け、広い視野を持って次世代に貢献していければ、と思います。

第75回一高祭を振り返って 運営委員会委員長

3年H組 新堀 振一郎

正直言って、僕は第75回一高祭に対して不安な気持ちがありました。僕らにとっては初めての一般公開であり、予期していないようなトラブルがあったらどうしよう、などと思っていたのを覚えています。しかし、それ以上に、ほぼ何もない状態から自分たちで自分たちの思うように文化祭を作り上げていく、という期待を感じていました。実際にやってみると、委員のなかであれほど議論を重ね、先生方とも協議をしたのに、起こってしまった問題や誤算も多々ありました。しかし、最終的には、大きな事故もなく良い結果に終われてよかったです。めったに経験できないようなことを経験できたので、とても楽しかったです。第75回一高祭を作ってくれたみんな、ありがとう。



第一会場委員会委員長

3年F組 久保田 智博

昨年の後味の悪い記憶として、当日企画の来場者の数が少なく、出演者もどこかもの足りなさそうにしていた表情がありました。今年は、沢山の方に足を運んでもらい、用意した椅子をいっぱいにするのが個人的な1つの目標でした。広場委員会と協力して、事前に各家庭に配付したタイムテーブルや、各団体が独自に宣伝をしたことの甲斐あつてか、今年は、多くのお客さんに楽しんでもらうことができました。また、常に空調や天候に注意を払い、換気を最大限に工夫したおかげで、本祭の2日間に、体育館で体調不良者が

出ることもありませんでした。来年も、多くの人に体育館に来てもらえるよう、宣伝や換気を意識して、頑張ってもらいたいです。

第二会場委員会委員長

3年G組 長田 朋晃

今年度も、コロナ禍での一高祭の実施でしたが、制限のある中でも、企画の多様性を重視して活動しました。その結果、お化け屋敷など、昨年度は実施できなかった企画を実施することができ、嬉しいです。第二会場委員長として、減点などにはとても悩まされました。その分、絶大なやりがいと私自身の人間としての成長も、実感することのできたと思います。準備から当日まで非常に充実し、楽しい日々を送れました。私を支えてくれた第二委員をはじめとする皆さん、本当にありがとうございました。そして、第76回一高祭実行委員会の皆さん、委員会を主体となつて運営する経験は、高校生活3年間の中で、かけがえのない最高の思い出に必ずなります。ぜひ、最後まで楽しんでください。

第三会場委員会委員長

3年D組 吉田 紗花

今年度の文化祭は、前夜祭や後夜祭を開催しただけではなく、保護者の方も招待するという、昨年とは大きく異なった開催形式で、本来の文化祭を経験していない身としては、結構不安でしたが、幹部を始め、第三会場委員が、活動に積極的に参加し、当日のシフトはもちろん、急な変更にも迅速に対応してくれたおかげで、転換や公演では時間を過ぎることなく、感染症対策も消毒・換気を十分に行うことが出来ました。生徒の皆さんと保護者の方に安全に楽しんでいただけたので良かったです。来年度以降も色々大変なこともあると思いますが、防音や換気に気をつけながら、一高祭を盛り上げてほしいと思います。

ゲート委員会委員長

3年H組 中山 和也

今年度は、同居家族のみの制限開催でしたが、一高生全員にとって、はじめての外部の人を呼んでの開催でした。それなので、接客など、不安になる要素



がたくさんありました。特に、GATE委員会は、性質上、外部の方に一番最初に接する組織の1つでもありました。委員長としても、3年になるまでに通常の一高祭を経験しておらず、たくさん不安を与えてしまったと思います。しかし、ゲートをほめてもらい嬉しかったのも、精一杯やれたからだだと思います。

後輩たちへ。コロナなど様々な要因によって、一高祭は、開催できるか、どのくらいの規模でやるか、など多くのことに振り回されます。しかし、一高祭が成功するかどうかは、君たちが次第だと思います。精一杯やれば大抵のことはなんとかなると



思います。次の一高祭を楽しみにしてします。(だいぶ上からになってしまいました。すみません)

広場委員会委員長

3年G組 庄村 倫太郎

広場委員会の仕事は、壁画の建設からMスクの運営まで、多岐にわたります。人手不足の中、一高祭を迎えた広場委員会でしたが、委員の尽力の甲斐もあって、何とか良いコンテンツを提供できたのではないのでしょうか。特に、壁画のイラストやMスクの音源の管理など、専門性の高い仕事を引き受けてくれた委員には、頭が上がりません。

委員会外でも協力して下さった方々にも、感謝してもしきれません。

これからの一高祭では、広場企画及び委員会の宣伝にも力を入れ、活気のある広場を作り上げ、より多くの方に楽しんでもらえるようにしてほしいと思います。

販売委員会委員長

3年D組 山崎 晴実

販売委員会で大変だった事は、情報のやり取りがうまくいかず、当日のトラブルに結構焦りました。それでも、他の販売委員や先生と一緒に解決策を考え、最後にはどうにかなったの



で、私としては文化祭大成功です！良かったことは、販売委員会の特権を生かして、好きなお店をラインナップできたことです。これに関しては、ばんばんざいです。個人的には、つじやのサンドイッチが最高においしかった。

来年度の委員のみなさんへ。お店とのやり取りや団体との連携など、初めてで慣れないことが多いと思いますが、皆さんで協力し、がんばってください。

委員長からお願ひするのは気が引けるもんなので、周りの委員が手を差し伸べてくれるような委員会になるといいと思います。

宣伝広報委員会委員長

3年B組 高井 穂名実

今年の一高祭は、全く経験がない状態で不安も多しなな、先輩達の過去の活動を追いなながら、よりよい形にする、ということを中心がけていました。その結果、上手くいかなかったこともありましたが、多くの人の協力を得ながら、形にすることが出来て、良かったと思います。正直、当日、パンフレットを持っている人を見たときは、気が気でなかったです。来年度もどうなるかは分かりませんが、暗中模索して、彼らなりの文化祭を作り上げてほしいです。

放送委員会委員長

3年F組 藤井 玲

今年の一高祭では、昨年度と比べて委員の人数が増大したことにより、活動の幅を広げ、例年の活動に加えて、放送委員会独自の活動であるラジオを放送することができました。近年、このラジオを行っていませんでした。そのため、来場者の皆様に楽しんでいただけるか、とても不安でしたが、たくさんの方から好評を頂き、とても嬉しかったです。

部活動報告

華道部

今しかできないこと

2年B組 八島 優花

「花いけバトル」

これは、普段の活動のような、静かで穏やかな生け花とは全く異なったものです。高校生が5分間、花と真剣に向き合い、即興で花を生け、熱い戦いが繰り広げられます。本番ステージには、多種類の花材と枝物、流木、竹などが並べられており、そのような壮大な場に立つことは、人生初めてのことでした。

この花いけバトルで一番身についたと感じるものは、仲間との絆です。即興で花を生けるとは言いつつも、バトル前には、チームメイトと仕上げる作品のイメージを話し合います。作品に真摯に向き合い、そし

来年以降、どのような状況下一高祭が行われるのかは、全く分かりません。しかし、その中でも、より多くの人に楽しんでいただけるような一高祭を作り上げてほしい、と願っています。

て本番中の気持ちの繋がりが目指す方向が重なっていったとき、自分たちの想いが籠もった作品に繋がっていく時は、言葉では言い表せないような高揚感に包まれます。「緊張しているも、仲間がいるから頑張れる」そんな思いでお互いを支え、信じ合いながら挑むステージは、高校生の今しかできない、本当に貴重な経験をさせていただきました。

新型コロナウイルスの影響を受けながらも、たくさんの方々のご支援を得て、このような機会に参加させていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



今後とも土浦一高華道部をよろしくお願い申し上げます。

ソフトテニス部

3年A組 瀬古澤 舜

「ソフトテニス」という名前を聞きますと、みなさんはなにを思い浮かべますか？個人競技であり、1対1でボールを打ち合っているというイメージなどではないかと思えます。しかし、実際のところ、ソフトテニスにおいては、個人戦というとダブルスを指すことがほとんどです。自分自身とペアがいて成り立つ、ダブルス⇨個人戦なのです。それぞれのペアが、日々汗を流してプレーの関係を磨き、その精度を高めていきます。スピード感あふれる試合が繰



り広げられます。相手の打球が手元に到達するまで、時によっては1秒にも満たないこともあるという高速で展開される試合の中で、反射的に出るペアとの連携プレー。美しくもあります。これこそがソフトテニスの最大の魅力と言えるでしょう。

この春、インターハイ予選では、あと2試合勝てればというところで、本戦出場を逃してしまいました。先立つ関東大会予選の個人戦ではベスト16という成績にて、念願の関東大会に出場することができました。これは、土浦一高ソフトテニス部という環境に3年間身を置き、日々の練習を積み重ねた結果だと思えます。練習・大会と長い時間を共有したソフトテニス部員全員に感謝いたします。

最後になりましたが、充実した時間を送ることができたのも、顧問の先生方の指導の賜物です。3年間、本当にありがとうございました。

ヨット部

3年H組 吉見 有理

唐突ですが、ヨットとはどのようなもので、ヨット競技とは

はどのような競技か、ご存知でしょうか。高校生が主に乗るヨットには、2種類あります。1つ目は、420級という、帆が2つあり、船の全長が420センチの2人乗り用のヨットです。2つ目は、レーザージャ

ル級という、帆が1つある、1人乗り用のヨットです。どちらの船にも動力はついておらず、帆に受けた風をエネルギー源として進みます。そして、ヨット競技とは、出場艇が同時にスタートし、海に打たれたブイを回り、その着順を競うものです。レース中は、風や波に合わせて体を動かしながら、自然環境が刻一刻と変わる中、それをいかに予測して他の艇を出し抜くかが鍵となるので、体と同時に頭も使います。また、自然を相手にした競技なので、自然を自分の思い通りにするのではなく、自然を上手く利用することが重要となり、他の競技とは違う面白さがあります。

今年度のチームは、入部当初から、新型コロナウイルスによる活動の制限を余儀なくされる中、外部顧問の方やOB・OGの方々、顧問の先生など多くの



方のご指導のもと、部員全員でアドバイスをし合いながら、切磋琢磨して練習することができました。その結果として、男子は13年ぶり、女子は20年ぶりに、

計3艇がインターハイの出場権を獲得できました。また、その後のインターハイでは、女子団体4位をとることができました。この結果は、今年度の部員だけでなく、OB・OGの方々が、代々積み重ねたもののおかげだと思えます。そして、後輩たちには、日々の練習や関東予選、インターハイを通して学んだことを通して、今後の活動に励んで欲しいと思います。

最後になりましたが、ヨット部の活動にご理解・ご協力くださった先生及びOB・OGの方々、またサポートしてくださったすべての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

定時制の活動

定時制教頭 武田和子(高39回)

今年度28名の新生を迎え、合計103名の生徒が定時制で共に学んでいます。全日制の学校と比べると、ごんまりしているように聞こえますが、実際には夜間の定時制高校の中では、群を抜いて大規模な学校と言えます。

定時制の学校生活は夕方5時頃から始まります。1時間目の授業ののち、短い時間で給食をとり、すべての授業が終わるのがだいたい9時頃です。その後の時間が放課後となり、部活動や友達との交流の時間になります。遅い時間帯ではありませんが、昼間、社会の一員として仕事に就いている生徒も多く、生徒たちにとっては心やすらぐひとときです。

定時制には、年齢も背景も様々な生徒がおり、多様な価値観が常に存在しています。このような環境において、お互いを思いやり尊重する気持ちを育て、生徒ひとりひとりが、より一層豊かな人生を送れるよう支援していきたいと思えます。

○定通体育大会

高体連定通部の県大会が6月に行われました。陸上には2名が参加し、1年伊藤春奈さんが女子走幅跳と800mで準優勝、2年宮寛泰君が男子5000mと3000m障害で優勝し、3000m障害では大会新記録、県高校定通新記録を更新しました。バドミントンには10

名が参加し、男子シングルスでは、2年山崎心輝君が優勝、4年水田渉君がベスト8、男子ダブルスでは小林・介川組が優勝、坂本・松浦組が準優勝、女子シングルスでは4年齋藤亜衣さんが3位という好成績を残しましたが、卓球には3名が参加しましたが、善戦するも惜しくも敗退となりました。

全国大会は8月に行われ、茨城県代表として本校生徒も出場。陸上では伊藤さんが走り幅跳で全国12位、宮君が5000mで全国14位という成績を勝ち取りました。バドミントンでは、個人戦(山崎君)団体戦に出場



し、共に3回戦進出という昨年を上回る成績を修めました。スポーツを通して、あきらめない気持ち、そして自ら考える力を育んでもらいたいと思います。頑張る生徒たちをとても誇りに思います。

○紅白対抗体育祭

6月下旬、生徒会主催による紅白対抗体育祭が行われました。定時制のクラスは各学年1クラスずつですが、人数に大きな差があります。今年度はクラスをわけての紅白戦とすることで、人数の偏りを克服し、誰もが楽しむことのできる体育祭を実現することができました。生徒たちの自主的な実行力や生き生きとした表情を目の当たりに



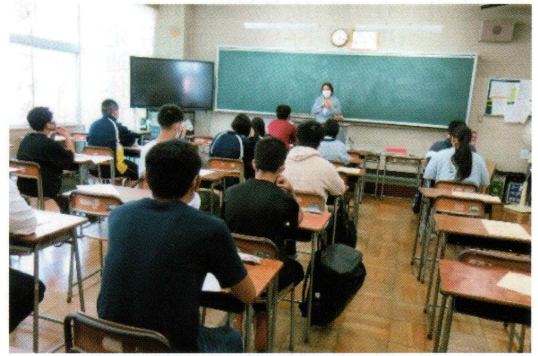
し、鬱陶しい梅雨のさなかの衣服の清涼剤のように感じられました。

○総合的な探究の時間
昨年に引き続き、毎週水曜日



に学年縦割りの6講座に分かれ、探究活動を行っています。コロナ禍にあることや、活動する時間帯についてなどの定時制ならではの課題に阻まれ、なかなか思うようには進みません。地域との連携が可能であれば、もう少し幅の広がりをもたせることもできるかもしれません。何事も簡単にはいかない……身をもって体験する探究活動に、生徒と職員ともに学び続ける毎日です。

○SC講話・薬物乱用防止講話
1年生を対象にしたスクールカウンセラー講話においては、コミュニケーションについてはお話を伺いました。お互いを尊



重しながら自己主張をするというアサーティブな話し方を学び、有意義な時間となりました。また、全校生徒を対象にした薬物乱用防止講話においては、薬物の恐ろしさについて学びました。各教室でのZoomをつないでの試みは、生徒たちにより一層の臨場感を与えました。

職員室だより

数学科より

数学 井坂 直樹

数学科職員室は、普通教室棟1階ほぼ中央、教務室と部屋を分け合う形で位置している。レイアウトは今も昔も(?)変わ

らず、全員が部屋の内側方向を向いて座り、それは入室する生徒を威圧しているのか、はたまた円順列を体現しているのか、真意の程は分かりません。とはいえ、職員室入り口や廊下には質問スペースが存在し、質問する生徒だけでなく、常時ここで学習する「主」が現れる年も。昨年度から附属中の職員も加わり、更に活気あふれる職員室となつていきます。

数学科の職員は、普段はたわいもない会話をしている、ひとたび数学的に気になることがあれば、議論が始まります。日々の授業、そして扱う問題・内容一つ一つに拘りを持ち、切磋琢磨する気概の表れです。こうして、自らを高めていくことが、生徒の知的探究心を刺激し、数学を通しての論理的思考力や発想力の育成、何より数学を楽しむ生徒が一人でも増えることにつながると信じて、これからも生徒に向き合って参ります。



会費納入のご協力とお願い

「進修同窓会」の会員の皆様に対しまして、平成7年の「同窓会報」送付の際に、初めて会費納入のための「振替用紙」を同封することになりました。
その結果、平成7年度は、1,195万円に上がりました。(従前は、数10万円)その後、1,000万円以上の納入が10年ほど続き、平成20年代半ばになると800万円台、平成22年度には680万円、と推移し、減少傾向がはつきりしてきました。
ただ、令和元年度720万円・令和2年度770万円・令和3年度799万円と推移し、幾分持ち直しています。
同窓会の予算の3分の2は、会員の皆様の会費により賄われているのが実情です。
納入額が減少することによって、本会の活動を活発に推進することが、難しくなることはもちろんですが、特に、「生徒奨励費」・「生徒活動補助費」など、現役生徒への支援が滞ることになります。
現在、同窓会員は、約35,000名ですので、会員の1割の納入で、1,000万円以上となるはずですが、
そこで、改めて、「会員」の皆様の「会費納入」をお願いする次第です。

進修同窓会規則(抜粋)
第12条 本会の経費は第10条の入会金、年会費、終身会費及び篤志寄付金を以て充てる。
一、年会費は、6年目以降は、3千円以上とする。
二、終身会費は、3万円以上とする。
副会長・財務委員長 鈴木義人(高21回)

令和5年度 進修同窓会定期総会のご案内

令和4年9月3日に開かれた臨時正副会長会議におきまして、3年間で中止された進修同窓会定期総会及び周年記念祝賀式を次のとおり開催することに決定しました。

- 一、期日 令和5年4月29日(土) 午後1時
- 二、場所 土浦第一高等学校校体育館

*卒業周年祝賀式該当学年

- 卒業60周年 高15回、定13回
- 卒業50周年 高25回、定23回
- 卒業40周年 高35回、理12回、定33回
- 卒業25周年 高50回、理27回、定48回
- 卒業15周年 高60回、定58回

一般会員・周年記念該当会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

進路状況レポート

東大14名(国公立全国18位)
京大6名
筑波大27名 東北大29名
国公立大医学部医学科19名

進路指導部長 石垣 政雄

2年目を迎えた大学入学共通テストですが、全体的に、授業での学習プロセスや日常生活の場を題材にした問題が目立ちました。また、複数の資料などから情報を読み取って考察する問題も複雑化し、その結果、特に理系科目で難化が見られました。数学ⅠAでは平均点が約38点と、センター試験の時代から見ても過去最低となり、大変厳しい入試となりました。今後の予想としては、今年ほどではないですが、試行調査に近づけていく、すなわち平均点5割を想定して作られていくと思われま

国公立大学の志願状況ですが、3年ぶりに増加に転じました。共通テストの大幅難化はありましたが、難関大を中心に成績上位層でも共通テストの得点ダウンが顕著だったことにより、結果として「2次勝負」と強気な出願傾向が見られたことが要因と考えられます。

私立大学においては、志願者は微増に留まり、一昨年が対前年比86%の大幅減だったことを考えると、コロナ禍以前の水準にはほど遠い状態です。今年度も、コロナ禍での併願校絞り込み傾向は継続しており、加えて共通テスト難化により、「事後出願」での共通テスト利用方式が、敬遠傾向にあったと考えられます。

本校の合格状況については、表の通りです。国立難関大学の合格者数は、北海道大6名、東北大29名、東大14名、東工大1名、一橋大3名、名大1名、京大6名、阪大4名、九大2名と合計66名です。その他で合格者の多い大学は、茨城大21名、筑波大27名、千葉大13名となっています。

次に、医学部医学科については、医学コースも設置され、着実な成果を上げています。国公立大合格者数は、旭川医科大2名、弘前大2名、山形大2名、筑波大3名、佐賀大1名など19名。国公立大以外では、防衛医科大1名を含む10名の合格でした。

新卒生の国公立大合格者数は127名。現役進学率は60.3%となり、本校において4年連続で60%を超える高い進学率でした。こうした中、現1年生から新学習指導要領のもと「情報」が受験科目に加わります。また、附属中も2年目に入り、再来年度には高校に進学します。過渡期を迎えている本校としては、今後一層の学習指導・進学指導の充実が求められています。

令和4年度入試合格状況

国公立大学

Table with 4 columns: University,合格者,新卒. Lists various national public universities and their admission statistics.

私立大学

Table with 4 columns: University,合格者,新卒. Lists various private universities and their admission statistics.

大 学 校

Table with 4 columns: University,合格者,新卒. Lists university counts for defense medicine and total university counts.

医学部医学科

Table with 4 columns: University,合格者,新卒. Lists medical department admission statistics for various universities.

令和3年度 進修同窓会決算書

収入総額 12,418,831 円
支出総額 9,531,841 円
差引残額 2,886,990 円 (次年度へ繰越)

【収入】 単位: 円

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減(△), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 繰入金, 寄付金, 雑収入, 合計.

【支出】 (残額欄の△は決算額が予算額を超過していることを示す。)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額, 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 予備費, 合計.

上記のとおり決算しました。

令和4年3月9日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 大野 金一
監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

令和4年3月9日

監事 高山 了
監事 助川 博夫
監事 杉山 博

令和4年度 進修同窓会予算書

収入総額 11,697,000 円
支出総額 11,697,000 円
差引残額 0 円

【収入】 単位: 円

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較残額(△), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 繰入金, 雑収入, 合計.

【支出】

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較残額(△), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 予備費, 合計.

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。

令和4年3月26日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 大野 金一

編集後記

昨年度より、同窓会会報の編集委員として、参加させていただくことになりました。...

により制限されていた活動が少しずつ再開され、その生き生きとした在校生の様子を写したものを採用しました。...



住所変更手続きのお願い

住所や電話番号等を変更された方は、左記のEメールへ送信下さい。...

進修同窓会事務局

Eメール shinsyu@tsuchinurai-hibk.ed.jp
FAX 029-1826-13521

- 委員長 武井秀一 (高23)
委員 飯村弘男 (高5)
委員 櫻井忠弘 (高18)
委員 高井了雄 (高19)
委員 竹井茂雄 (高19)
委員 原晋市 (高20)
委員 鈴木義人 (高21)
委員 鴻巣茂 (高21)
委員 江田麻子 (高34)
委員 大久保博 (高37)
委員 片岡達郎 (副校長・高33)
委員 プラニク・ヨゲンドラ (副校長)
委員 須藤一道 (全日教頭)
委員 武田和子 (定時教頭・高39)
委員 廣瀬光幸 (中等教頭・高38)
委員 大森伸一 (事務室長)
委員 坂本拓也 (高40)